岩瀬地区小・中学校長会広報　　第３４７号
令和６年　６月　３日

広報 岩瀬

発行責任者　熊田順一郎
本号編集責任者　中野久美子

巻頭言　「やればできるは魔法の合言葉」

須賀川市立第三小学校長　熊田　順一郎

「いわせの校長会は一枚岩」を今年度も合言葉にスタートを切った校長会ですが，児童生徒の健全な成長を目指すともに，学校が直面する教育課題の解決に向けて，校長としての資質を高めていくことができるよう，互いに学び合い，支え合いながら，組織的な活動を展開していきたいと思いますので，御協力をお願いいたします。

さて，私も年度末には役職退職を迎えます。岩瀬地区の校長会には８年という長期間所属させていただくことになり，校長として様々な経験をしましたが，一番心に残っていることを挙げるとすれば，やはり「コロナ禍」です。

今までの当たり前の学校生活が「目に見えない敵」に次々と奪われ，また，世界中の人々が悩み苦しむ日々を送らされるという正に「予測不能な未来」が突然訪れました。そして予測不能な未来においては，与えられたことや今までの経験をそのまま受け止めるだけではだめなのだということを私自身痛感しました。

思い起こせば，令和元年度末・２年度始の約２か月に渡る臨時休業措置，感染者の発生による学級閉鎖，授業や行事の変更，「新しい生活様式」を踏まえた学校生活など多くの制限を受けながらこれまでには考えられなかった対応を強いられての教育活動の展開でした。それと同時に「様々な制約があっても，子どもたちの活動や学びを止めない」「このような状況の中どうすれば様々な活動が実施可能なのか」と考える日々を通して，目の前に立ちはだかる壁を乗り越えていくには，自ら何が課題かを考え，判断し，解決に向けて全力を尽くす。未来を生きていくにはこの力をつけていくことが豊かな人生を切り拓くのに不可欠であるということを学ぶ契機ともなりました。

当時のそんな私を勇気づけ，この状況を乗り越えていく力を与えてくれた言葉が今回の表題であり，コロナ５類移行後の現在でも職員や児童に語ることの多い言葉です。

御存じの方も多いかと思いますがこの「やればできるは魔法の合言葉」は，創部２年にして選抜高校野球大会に初出場，そして奇跡的な勝利を収め，全国制覇を果たした愛媛県の済美高校の校歌にある一節です。（当時，モダン的な歌詞に驚くとともに，その歌詞と逆境を跳ね返した選手たちの姿が重なり，感動した記憶があります。）そしてこの言葉は済美高校野球部出身お笑いコンビ「ティモンディ」の高岸宏行さんの代名詞となっているポジティブ発言「やればできる」により，よく耳にするようになりました。高岸さんは、プロ野球のスカウトも注目するほどの投手だったそうですが，大学時代のけがが原因でプロ野球の道を断念し，お笑いの道を目指したそうです。そんな高岸さん自身が勇気づけられ，今まで大切にしてきたのがこの言葉であり，それをみんなに伝え，元気や勇気を与えようと始めたとのことでした。

「やればできる」・・・。ありふれた言葉ですが，前向きに物事をとらえ，特に，これからの未来をたくましく生き抜いていく子どもたちに大切にしてほしい言葉だと思いますし，私自身も「やればできる」の精神，合言葉で，児童，職員とともに，校長としての残りの日々「よりよい学校」づくりに努力してまいります。

～すべての子どもを かけがえのない価値ある一人に～

須賀川市立第一小学校　柿沼孝明

私が通っていた相双地区のＡ小学校は、相馬中村藩城跡の堀沿いにあり、歴史の重みを色濃く残した学校でした。昭和５３年秋の運動会の最終種目は「神旗争奪戦」。３人で組んだ馬に武将がまたがり、打ち上げられた神旗を自作の神棒で奪います。６年生は、だれもが武将に憧れ、選ばれた子は誇らしげにこの日を迎えたものでした。

運動会が近づき、だれが武将になるのかが決まる日。担任の先生は、学級全員を起立させた後、思わぬことを話し始めました。

１つ、お父さんもＡ小学校だった人以外は、座ってください。

２つ、本家の人以外は、座ってください。

３つ、長男の人以外は、座ってください。

今では考えられないことですが、最後まで残った子が武将候補になる、そんな時代でした。立っている子の中に特殊学級（当時名称）の浩太くん（仮名）がいました。言葉に遅れがあり、かけ算九九もおぼつかない浩太くん、交流授業の時にはいつも教室の隅っこに席が用意されていました。そんな浩太くんに、先生が、「浩太くんは座ってください。」と言いました。子どもながらに違和感を覚えました。そして、この日の昼休みに、廊下で担任と隣の学級の先生が、浩太くんのことで口論（らしきもの）になりました。

結果、浩太くんは、晴れて武将デビューを果たし、神旗を取れなかったにしても、卒業までの半年間を意気揚々と過ごし、卒業文集に小学校生活で一番の思い出と記すことになります。

令和６年５月、ある学級で道徳（価値項目：「正直」）の授業を参観した際に、特別な支援が必要な蓮くん（仮名）が、教室の真ん中にいて、みんなと同じように大切にされ、さらに尊重されている姿がありました。

「ぼくは、正直に言うのは怖いけど、あとで叱られるよりいいし、すっきりするし…。」そんな蓮くんの言葉を、学級のみんなが身を乗り出して聞いています。表情で（そうだよね）（分かる、分かる）という気持ちを蓮くんに伝えようとします。

印象に残った担任の言葉。

「１年前、叱られ、ふてくされることが多かった蓮くん。支援が必要な子が認められる場面を、まずは大人がつくりました。でも、それを続けていくと周りの子どもたちが支えていくようになるのです。少しずつ自信を持った蓮くんの発言は、ときに、はっとさせられるものがあり、周りの子は『支える』から、対等な仲間として『尊重する』ことが多くなりました。実は、周りの子どもたちの方が蓮くんのおかげで成長しているのかもしれません。」

４５年前の出来事をふと思い出し、「学校の役割ってなんだろう？」と考えさせられたこの５月。今年度４月１日に、全教職員で大切にしようと確認した以下の「思い」を具体的な姿として何度も表れるよう先生方とともに精一杯努めていきます。

～すべての子どもを　かけがえのない価値ある一人に～

出会い

須賀川市立小塩江小学校　星　　徹

私が今までの人生の中で一番影響があった出会いは、小学生４・５年生の時に担任であった木村靖先生である。教師を志すきっかけを与えてくださった先生でもある。

当時の私はとてもやんちゃ坊主？だったようで、木村先生のことをからかってはよく叱られ、度が過ぎたときには、放課後に木村先生からご指導後、両親宛ての手紙を預けられ、家でもこっぴどく叱られる有様であった。それでも、私の中ではとても大好きな先生であった。

ある日の放課後、教室で日直の仕事をしていると、木村先生に呼ばれて次のような声をかけられた。

「将来教師を目指してみないか？テストの〇つけ、おもしろいぞ」

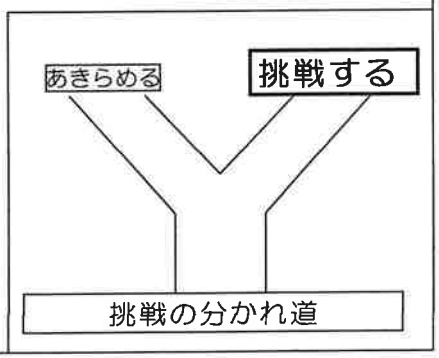
この言葉が私が教師を目指そうとしたきっかけである。当時はテストの〇つけの楽しさをうのみにし、教師になる動機としていたが、今となればそれはきっと言葉のあやであり、私の小学校生活における言動や性格から、教師に向いているのではないかと考え、声をかけてくださったと思っている。やんちゃ坊主？ではあったが…

別れも突然であった。木村先生が転任される年の離任式、見送りの時「これからずっと、年賀状を交換しよう」言われ、毎年木村先生には近況報告を添えて必ず送り、また、木村先生からもいつも励ましの言葉を添えられた年賀状が届いた。大学１年生の時、初めて木村先生から年賀状が届かなかった。次の年も届かなかったのでお手紙をつづったところ、木村先生の奥さんからお返事が届いた。昨年、病気で他界されたとのことだった。父と一緒にご自宅へ伺い、「私は絶対、教師になります」と墓前に誓った。

その後、４年間私の努力不足で採用試験に落ち続け、あきらめかけたときもあったが、５年目になんとか合格をして現在に至る。私が今まで担任をした子どもたちには、一生年賀状を交換しようと伝え、今でも交流を続けている。校長となった今、木村先生との出会いを通して人との出会いのありがたさ、そして教師からの一言の重さを改めて感じている。

私は昨年度から岩瀬地区で大変お世話になっている。初任地であった喜多方以降ずっと南会津で勤めてきた私にとって、立場も変わり、初めての赴任地でもあったため不安な気持ちでアパートに着いたことを思い出す。昨年度初めての校長会ではとても緊張した中であったが、たくさんの方々にお声かけいただき、なんとか、校長としてやっていけるのではないかと思えた。岩瀬地区の校長先生方に出会い、たくさんのことを学ばせていただいたり、教育委員会の皆様にもいつも現場を大切に思ってくださる気持ちをいただいたりと、私は本当にすばらしいところに来たんだと毎日感謝の気持ちでいっぱいである。

今年度の小塩江小学校のテーマは「挑戦の分かれ道」。１日の中でもたくさんの分岐点があり、必ず何か一つを選択して生活している中で、子どもたちにはいくつもある挑戦の岐路に立たされたとき、挑戦する方向へ取り組んでほしいと伝えた。私の今年度の挑戦は「漢検２級合格」数年前から、挑戦したかったが気が進まなかった。これを機に、私も挑戦への一歩を踏み出したい。（相当厳しい挑戦にはなるが…）



どの子にとっても楽しいと思える学校へ

須賀川市立大東小学校　齋　藤　　敦

歴史と伝統ある須賀川市立大東小学校に着任し、２か月が過ぎようとしています。新たな学校での勤務に戸惑いながらも、子どもたちと先生方に支えられながら何とか勤めることができています。

毎朝の校門前での街頭指導から校長としての業務がスタートします。登校してくる子どもたちに、「おはようございます。」の挨拶を繰り返し、子どもたちからの挨拶が少しずつ大きくなってきていることに細やかな喜びを感じています。入学したばかりの１年生に教室訪問の際「校長先生、今日は遅かったね。」と声をかけられ、私の挨拶を待っている子がいると思うと街頭指導へ向かう足取りも軽やかになりました。本校の子どもたちは、人懐っこく気軽に話しかけてくる子が多く、前向きで集団としてのまとまりも感じさせてくれます。屈託のない笑顔を見せてくれるこの子たちが毎日、学校に来る喜びを感じ、「また明日も学校に行きたい。」と思えるような学校にすることが校長としての責務であると思っています。そんな学校にすることに気づかせてくれたのは、教育者の東井義雄さんの『どの子も子どもは星』の詩です。

この詩に触れるたび、校長としての責務を痛感させられます。子どもは星ですから、そのまばたきにこたえるのが学校の使命だと思います。中には、自分の力で輝くことができない子がいるかもしれません。そんな子がいないよう学校が太陽となってどの子へも光をあてなくてはならないと強く思います。その子を支えるちょうどよい、優しく、温かい、陽ざしのような光を。まばたきをやめそうな子はいないか、自分から光を消しそうな子がいないか、目を凝らして見つめられる学校を組織したいと思います。この詩に出てくる様々な星一つひとつと本校の子どもたちの顔を重ね合わせながら、その笑顔をより輝かせられる学校にしようと微力ながら取り組んでいるところです。そのための柱としているのが「一人ひとりが生かされる集団づくり」です。「望ましい集団」をすべての教育活動の基盤に位置づけて取り組んでいます。また、子どもたちを支える先生方が、教員としてのやりがいを感じられる職場環境づくりにむけ、働き方改革も進めていきたいと思います。

大東小学校の子どもたちが自分だけの光を輝かせながら毎日期待をもって登校できる学校を目指しながら、精一杯校長としてその職務を果たしていかなければと強く思っています。

『どの子も子どもは星』　　東井 義雄

みんなそれぞれがそれぞれの光をいただいて
まばたきしている
ぼくの光を見てくださいとまばたきしている
わたしの光も見てくださいとまばたきしている
光を見てやろう
まばたきに　　応えてやろう
光を見てもらえないと子どもの星は光を消す
まばたきをやめる
まばたきをやめてしまおうとしはじめている星はないか
光を消してしまおうとしている星はないか
光を見てやろう
まばたきに応えてやろう
そして
やんちゃ者からはやんちゃ者の光
おとなしい子からはおとなしい子の光
気のはやい子からは気のはやい子の光
ゆっくりやさんからはゆっくりやさんの光
男の子からは男の子の光
女の子からは女の子の光
天いっぱいに
子どもの星を

創立 150 周年に寄せて

須賀川市立白方小学校　佐藤　和仁

昨年度、本校は創立 150 周年を迎え、以下の記念事業に取り組みました。それぞれご紹介します。

【記念行事「白方フェスタ」実施】

例年実施している学習発表会「白方フェスタ」を拡大し、第一部を学習発表会、第二部を記念式典として 10 月 14 日に実施しました。白方地区の皆さまに声を掛け、一般の方々も自由に子どもたちの様子を見ていただくようにしました。

第一部の学習発表会は、合奏、劇、総合的な学習の紹介等盛りだくさんの内容でした。子どもたちの元気と工夫がたくさん詰めこまれた発表に盛大な拍手を頂きました。

第二部では白方出身の落語家桂幸丸さんをお招きし、記念公演「白方で過ごした少年時代」をお話いただきました。子どもたちに夢を大切にして育っていってほしいという幸丸さんの優しさあふれるトークでした。更に高座では、代表児童による落語体験と動物の物まねをテーマにした落語を一席披露していただき、会場は温かな笑いに包まれました。

【記念広報誌「いずみ」発行】

会員数の減少による PTA 組織の縮小に伴い、広報部活動は今回で最終号になります。そこで、最終号にふさわしく、オールカラーで拡大版を作成することになりました。誌面は、第１面校舎全景・全校児童集合写真、第２・３面地域の皆様からのご寄稿、第４・５面学校年表、第６～８面は全校生による短作文です。写真をふんだんにあしらい、大変読み応えのある記念誌となりました。地域の皆さまにも回覧等でご覧いただき、好評を得ました。

【記念品「白方クリアファイル」作成】

クリアファイルにはドローンで撮影した航空写真を使用しました。撮影当日は雲一つない快晴。児童と教職員で、「白方小学校　150th　2023」の人文字を作り、ドローン操作のかっこよさに歓声を上げながらの撮影でした。

仕上がった航空写真を見ると、校地内の緑の美しさが際立っています。普段から学校支援ボランティアの皆様に校地内の花壇や植栽の手入れをしていただいているおかげです。現在校舎が建つ場所は、以前運動公園として緑に囲まれた施設でした。校舎が移転して 30 数年経ちますが、地域の皆さまのおかげで今なお手入れが行き届いた美しい環境が保たれています。

保護者の皆様、地域の皆様、そして何よりも 150 年目の節目を白方小学校児童として迎えた 79 名の子どもたちのおかげで心に残るすばらしい記念事業とすることができました。心より感謝いたします。誠にありがとうございました。

「広戸小ならではの教育」

天栄村立広戸小学校長　富永　陽一

広戸小学校は、明治９年創立で、１４９年目を迎える伝統ある学校です。令和６年度は全校児童８２名、ＰＴＡ会員実数は、６１戸です。両親共働きの家庭が多く、養育には祖父母の関わりが多いです。父母の教育に対する関心は高く、授業参観やＰＴＡ行事への参加率は高いです。

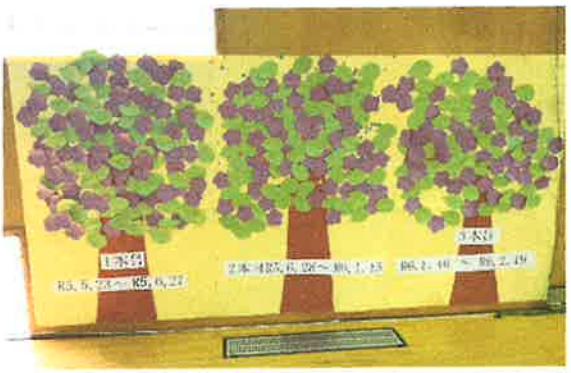
広戸小学校の子どもたちは明るく素直な子どもたちばかりで、教室からは、いつも明るい声が響き、笑顔で仲良く、一生懸命活動する姿を見ることができます。

「日本一なかのよい学校宣言」

広戸小学校では平成２６年度に「日本一なかのよい学校宣言」をし、それ以来継続して取り組んでいます。当時の児童と先生方で作成したそうです。『いじめを無くすためには、誰とでも仲良くなれる学校にすることが大切で、一人じゃないと思うだけでとても心強くなる。』という当時の子どもたちの考えを軸として、決していじめを許さないという先生方の決意も込めて「日本一なかのよい学校宣言」を作成したのだそうです。

新しい取組として、「ありがとうの木」を設置しました。児童がお互いのよさを見つけ、伝え合うために職員室に掲示した木に友だちへの「ありがとう」の感謝のメッセージや「すごいね」の尊敬のメッセージをカードに書き掲示していく取組です。昼の放送時に担当児童が寄せられたメッセージを紹介する場を設け異学年が思いを伝え合い交流できるようにしています。ありがとうの木も４本目となり、もうすぐいっぱいになりそうです。

「日本一なかのよい学校宣言」を子どもたちに常に意識させながら学校生活を送るようにしています。失敗したり、悩んだりしたときに振り返らせる指標ともなっています。



「広戸小学校を見守る栴檀（せんだん）」

広戸小学校の校舎と校庭の間の斜面に大きな木があります。この木は「栴檀（せんだん）」という植物で広戸小の校章にも描かれています。広戸小学校の校章は、「ペン」と「せんだん」の葉を図案化した物です。ペンは、よく考え、進んで勉強する児童を表しています。また、「せんだんは双葉より芳し」というように限りない可能性をもつ子どもたちが心身共に健やかに伸びていくようにとの願いがこめられています。暑い日には、栴檀の木陰で涼み、雪の積もった寒い日には、栴檀のある斜面でそり遊びをします。今まで、そしてこれからも広戸小学校の子どもたちを見守り、子どもたちの健やかな成長を願っていくことでしょう。

「秀麗な一中生となるために」

須賀川市立第一中学校　齊藤　俊明

４月、校長となり７回目の第１回職員会議。毎年同じことを指示伝達事項としている。

○「命を守る」保護者から預かった生徒の命を失うことは教育者としての敗北。教職員の命も同様。自然災害、交通事故、学校事故、いじめなど何よりも最優先に対応していく。
○「信頼関係を基盤に」教職員と生徒、教職員と保護者、教職員同士の信頼関係が成立してるからこそ教育活動の効果が現れる。築くには時間がかかるが、失うのは一瞬。日々の積み重ね、一人ひとりの積み重ねを大切にしていく。
○「保護者・地域との協働」学校の教育活動を広く広報していき、学校で何が行われているのかを理解していただく。中学生としてできる地域貢献に心がけつつ、地域の人・物・自然・文化など最大活用していく。その中で学校の応援団を増やしていく。
○「生徒の成長のために」様々な価値観、教育観を持った教職員や保護者がいて当然。判断に迷ったときも「生徒の成長のために」を判断基準としてベクトルの向きを揃え、同一歩調で対応していく。

２年目３年目の職員は昨年と同じ内容であると気づいているのだろうか。どこまで校長の願いが教職員に伝わっているか不安であるが、この願い・方針は伝え続けていきたい。

須賀川一中に赴任し、「時を守り 場を整え 礼を尽くす　秀麗な一中生となるために」という言葉を加えている。これは東洋大学陸上部監督酒井俊幸氏の講演を聴く機会があり、その中で「礼を正し、場を清め、時を守る」ことを徹底して指導しているとの話に大変共感したことがきっかけである。ネットで調べてみると哲学者・教育学者である森信三氏が「職場再建の三原則」として提唱されたものだと知った。その後森氏の著書「教師のための一日一語」などを読み、須賀川一中の校訓である「秀麗（他のものより一段とりっぱで美しいこと）」な学校づくり、生徒育成に生かせると思い４月の職員会議、入学式・始業式で（生徒に伝わりやすいようにアレンジし）「時を守り　場を整え　礼を尽くす」ことを行動目標とするよう話している。機会のある度に何度も繰り返し伝えており、２年目となった今年は大分浸透し、実践できてる生徒も増えてきているように思う。意識を変え、行動が変化し、習慣化され、様々な学校生活に波及効果があることを期待している。

校長としてメッセージを送った以上自分自身も意識を高め、後ろ姿で範を示そうと心がけている。毎日のルーティーンとして、朝昇降口に立ち登校する生徒を出迎え一人ひとりに「おはよう」と声をかける。毎日声をかけていると挨拶の声や表情、視線などから様々な情報が手に入る。朝学の時間にはほうきとちり取りを持ち廊下や階段の目に入るごみを拾う。時には教室にも入り掲示物を眺め、生徒に声をかけ、担任の姿に目を配る。ここでも様々な情報が手に入る。「時を守り 場を整え 礼を尽くす」。この意識改革、行動目標は、誰よりも自分自身にとって有益な教示となりそうである。

新任校長としてのこの１か月間の出来事

須賀川市立小塩江中学校　髙橋　光政

４月に新任校長として小塩江中学校に赴任して、１か月が経ちました。３年ぶりの学校現場に７年ぶりの中学校勤務、さらに初の単身赴任に初の校長職は新鮮そのものでした。今振り返ってみると怒濤の日々でしたが、ここまで順調にこられたのも、新参者を温かく迎えてくれた教職員、地域の方々、そして生徒のお陰であると感謝しています。この恩に応えるためにも１日でも早く頼りになる校長となるべく精進していきたいと思っています。

４月１日、第１回の職員会議では、校長としての理想『生徒一人ひとりに、期待の登校、満足の下校を保障する』を掲げ、その理想の実現のためには次の６つのことが必要不可欠であることを教職員に述べました。

1　教職員自らが心身ともに健康であること
2　教職員のチームワークを大切にすること
3　絶えず研修に励み、使命感と情熱にあふれた教師像を追求すること
4　すべての教育活動において、ねらいを明確にすること
5　保護者や地域の方々を大切にすること
6　自分の家族を大切にすること

そのためにまずは、自らが模範を示し、教職員と信頼関係を築き、同じ志で教育活動に取り組んでいけるようリーダーシップを発揮したいと思っています。

さて、たったの１か月ですが、様々な驚きや体験をしました。

まずは、修学旅行です。会津出身の私には、修学旅行先が関西方面！ということは驚きでした。さすが、福島空港が近い須賀川市内の学校ならではなのでしょう。生徒にとって、初めてのフライト体験や京都市内班別研修を通して日本の歴史・文化に触れることで、見聞を広めるともに仲間とのきずなを深めることができたようです。

次に、特設陸上部の朝練です。朝練自体は、どの学校でも行っていることですが、本校では、ほぼ全員が朝練に参加しているということです。しかも、１年生から３年生までが、毎朝、意欲的に楽しく陸上練習に取り組んでいる姿はほほえましいです。６月からは、全校生が特設合唱部で活動するとのこと。一人二役も三役をこなしている小塩江中生を誇りに思えました。

最後に、宇津峰山開きです。宇津峰山は、標高６７６ｍの独立峰で、南北朝時代に南朝方の北畠顕信の拠点宇津峰城が置かれ、国の史跡に指定されている山城で、本校の校歌の歌詞にもあり、校章のデザインにもなっています。４月２９日の宇津峰山開きに初めて参加しましたが、山頂から眺める景色のすばらしさや雲水峰（うつみね）神社大祭での荘厳な御神楽に感動しました。

たった１か月ですが、いろんな発見や経験を通して、須賀川市と小塩江中学校に日々愛着が持て、本校に赴任できてよかったと思っています。

本校は、全校生徒２３名の小規模校ですが、「小塩江中だからできること」「小塩江中にしかできないこと」への挑戦と創造を基本理念とし、生徒一人一人に『期待の登校、満足の下校を保障する』ことができるよう全職員で一致団結して学校経営を行っていく覚悟です。今後とも岩瀬地区小・中・義務教育学校長先生方、ご指導の程よろしくお願いいたします。

２年目「なりたい自分になる」

須賀川市立岩瀬中学校長　高橋英二

岩瀬中学校２年目となりました。素直な生徒たち、何事にも全力で取り組む先生方、そして開放的で広々とした校舎に囲まれ、毎日充実した学校生活を送っています。

【七夕飾り】

昨年度は忙しい日々を過ごしましたが、校舎内に飾られた季節に応じた飾り付けを見るたびに、季節を感じ、頑張る勇気が湧いてきたものです。

【ハロウィーン】

今年の目標　今まで以上に周囲に感謝しながら生活していこうと思っています。あまりにもたくさんの方々にお世話になり過ごした昨年１年間でしたので、大切な要素である感謝について、あらためて意識していきたいと考えています。

子どもたちには、「なりたい自分になる」という内容を始業式と入学式で伝え今年度もスタートしました。このスローガンは２年連続ですが、子どもたちには常に目標を意識し、１年後や卒業時、２０歳の自分をより具体的にイメージして「なりたい自分」を常に追い求めてほしいと伝えました。昨年度は学校だより「岩瀬の風」を通し、「なりたい自分になる」メッセージを何度か伝えてきました。そして３月には卒業生の最後の授業にお邪魔し、「なりたい自分になる」最後の授業を実施しました。メッセージの完結として、私から卒業生へ約２０分間のピアノ演奏をプレゼントしました。少しでも夢を追いかける自分の姿を伝えられたらという想いからでした。

今年度も夢を追いかけるために目を輝かせ、夢中になって取り組む岩瀬中生の姿が多く見られるよう学校経営に取り組んでいきます。

【卒業生へ】